

中華人民共和国上海市における上海語 テレビ放送と言語政策

——ポスト標準中国語普及時代の方言放送の行方——

A Study on TV Broadcasting in the Shanghai Dialect in
Shanghai City, the People's Republic of China

小 田 格

要 旨

本稿は、中華人民共和国上海市の上海語テレビ放送をめぐる政策の実態を明らかにし、その今後を展望するものである。そして、こうした目的の下、同市における言語政策の枠組みや言語の使用状況、上海語放送の歴史及び現状などを確認したうえで、これらの情報に検討を加え、もって次のような結論を導き出した。すなわち、同市では1980年代から上海語テレビ放送が実施されており、1990年代中盤には上海語のドラマが一世を風靡したが、しかしそれゆえ当局が規制に乗り出し、その後は不安定な状況が続いてきた。一方、ポスト標準中国語普及時代に入った同市にあっては、言語政策に関する新たなコンセプトが掲げられ、これに関連する各種施策も認められるものの、諸般の事情に鑑みるならば、上海語テレビ放送の拡大は想定しがたいところである。ただし、同国の言語政策の今後を占う意味においても、時代の先端を行く同市の動向には、引き続き注視すべきである。

キーワード

上海市、上海語、標準中国語（普通話）、言語政策、方言番組

I. 序 論

本稿は、中華人民共和国（以下、中国）上海市の上海語テレビ放送をめぐ

る政策の実態を明らかにし、その今後を展望するものである。筆者は、近年、小田（2016b；2017a）により、長江デルタ一帯の浙江省及び江蘇省における漢語方言（以下、方言）を使用したラジオ・テレビの番組（以下、方言番組）をめぐる政策に検討を加えてきたが、その際いずれも上海市の考察を今後の課題として挙げていた。

周知の通り、上海市は中国を代表する国際的大都市であり、また当地で主流の方言が上海語であることも比較的広く知られた事実のように思われる。上海語は学術的には呉語太湖片の下位方言に位置付けられ、現地では「滬語」又は「上海話」という呼称が一般的であるが、方言を南方と北方とに大別した場合、南方方言に分類すべきものであり、北方方言を基礎とする標準中国語（以下、普通話）とは系統を異にする。そして、この観点からすると、上海市は長江以南の南方方言区にあって唯一の直轄市であることも指摘できる。

それでは、同市の上海語テレビ放送は、いかなる環境下において、またどのように実施されているのか。管見の限り、この問いに対する答えを十分に示した論考は存在していない。上海市の上海語テレビ放送をめぐる政策の考察は、長江デルタの方言番組に関する研究を完結させるために不可欠の要素であり、さらには当地での上海語の使用実態の理解に資するものとも考えられる。

そこで、以下では、上海市における言語政策の枠組みや上海語の使用状況などを概観したうえで、今日に至るまでの上海語テレビ放送の実施状況を記述し、これらを通じて得られた情報に基づき考察を行うこととしたい。

II. 関係法令、事業計画等

本章では、上海市の方言放送に関する法令¹⁾及び規範性文件²⁾（以下、法令等）並びに言語政策に関する事業計画等での方言の取扱いを確認する。

1. 関係法令等

(1) 全国レベルの法令等

全国レベルの現行法令等のうち、放送領域での言語の使用に係る規定を備えた主要なものとしては、中華人民共和国国家通用言語文字法（主席令37号）（以下、「法」）、ラジオ・テレビ管理条例（國務院令228号）（以下、「条例」）及び「ラジオ、映画及びテレビにおける言語・文字の正確な使用に関する若干の規定」（国語字〔1987〕10号）（以下、「規定」）が挙げられる。

これらの法令等の関係規定を簡潔にまとめると、ラジオ・テレビ放送では普通話の使用を基本としなければならず、例外的に方言を使用して放送を実施する場合には、国又は省レベルの関係機関の許可を必要とするとともに、その数量は徐々に減少させるべきということとなる。

(2) 上海市の法令

上海市内を適用範囲とする言語・文字に関する現行の法令としては、上海市「中華人民共和国国家通用言語文字法」施行弁法（上海市人民代表大會常務委員會公告59号）が挙げられる。同弁法は、その名に違わず「法」の施行規則に該当する法令であり、2005年12月29日に制定・公布されるとともに、翌年3月1日より施行されている。

同弁法で方言使用に係る規定は9条である。同条は規定ぶりこそ違えども、内容的には全国レベルの法令等と大差なく、上海語を含む方言での放送は例外的な行為として位置付けられ、かつ、その実施には関係機関の許可を得ることが必須とされている。

2. 事業計画等

2001年からの「法」の施行に当たっては、この運用を徹底するための方策として「都市における言語・文字に関する事業の評価」³⁾制度が導入された。この評価制度は、都市部の言語文字関連の事業を対象とし、法令の遵

守状況をチェックするというものである。上海市は2004年3月に同評価を受審し、「普通話の普及が初期段階にあり、社会における漢字の使用が基本的に規範的」な状態にあると認定された⁴⁾。

その2年後となる2006年12月には、上海市言語文字工作委员会により「第11次五カ年計画期における上海市の言語文字事業計画（2006-2010年）」（滬語委〔2006〕7号）が公表されたが、この第1章（第10次五カ年計画期における上海の言語文字事業の成績及び経験）第1節（主要な成績）では「社会において人々が交流する際の方言の障壁は基本的に解消した」という認識が示された。また、第2章（第11次五カ年計画期における上海の言語文字事業の主要な任務及び措置）第1節（指導の思想）では、2006～2010年の言語政策の基本方針が示され、次のような記述が認められる（以下〔 〕は引用者）。

社会における言語生活の健全な発展を促進させ、国家通用言語文字〔＝普通話及び規範漢字〕を主体としつつ、多方言・多言語が併存し、その位置付け・構成が適切であるとともに、相互作用が良好なものとなるような言語の発展的状況の形成に努めていく。

この部分からは、国家通用言語文字のみならず、方言をも含めた多言語社会の構築を目指していく意向が読み取れる。もっとも、同計画で主眼が置かれていたのは、依然として国家通用言語文字の普及であり、「多方言・多言語が併存し」た社会の構築のための具体的な措置は限られ、2010年の万国博覧会開催に向けた英語対応等に関する諸事項が確認されるに留まっていた。むしろ方言に関しては、第2章第3節（主要な任務及び措置）に「方言、外国語、ネット用語といった社会で争点となっている問題に関心を払い、社会生活上の言語文字に対する監視及び調査研究を強化し、関連する監視報告を定期的に公表する」という記載が見られ、どちらかといえな

おも問題視されていたのである。

上海市の政策文書における方言の取扱いに大きな変化が見られたのは、2013年のことである。同年4月18日、上海市言語文字工作委員会は「上海市言語文字工作委員会による『国家中長期言語文字事業改革發展計画綱要(2012-2020年)』を貫徹・実現する件に関する実施意見」(滬語委〔2013〕4号)を公表した。タイトルに見られる「国家中長期言語文字事業改革發展計画綱要(2012-2020年)」(教語用〔2012〕1号)は、国の言語政策の中長期計画を取りまとめた文書であるが、その第2章(目標及び任務)第2節(主要な任務)には、第5項として「各民族の言語文字の科学的な保護」が挙げられ、各民族の言語に方言も含められるとともに、「方言の使用及び保護に関する科学的方策を探求する」という記載もなされた。

そして、滬語委〔2013〕4号文書は、教語用〔2012〕1号文書に示される諸方針を踏まえつつ、滬語委〔2006〕7号文書を前進させる形で策定されたものであり、方言に関する内容も当然にして数多く盛り込まれた。具体的には、まず第3章(明確な事業目標及び進度)第1節(全体的な事業目標)にて「各言語の役割分担が適切であるとともに、相互作用が良好な構成が基本的に形成されており、国家通用言語、方言及び外国語が異なる領域でそれぞれの機能を発揮し、社会の言語生活が全体的に調和のとれたものとなっている」ことが目指され、第2節(全体的な進度の要求)では、この状況について5年以内に成果を確認することとされた。また、こうした全体的な目標の下、第4章(全面的に実現すべき七大主要任務)第3節(社会における言語文字の使用に対する監視・検査及びサービスの強化)、第4節(国民の言語文字の使用能力の向上)、第5節(上海の言語資源の科学的な保護)には、上海語を含む各言語の学習、使用、調査、記録等に関する施策が掲げられた。

こうした内容に基づき、各年度の言語・文字に関する事業計画である「上海市の言語文字事業の要点」⁵⁾にも、上海語の保護に関連する内容が増加し

た。すなわち、2013年度には上海語の音声データベースの構築、保護・伝承の方法・手段の検討、童謡等のコンテストの実施などが盛り込まれ、2014年度には幼稚園での上海語体験活動の試行実施、2015年度には一部小中学校での上海言語文化校内活動の実施や、高等教育機関での上海語運用能力向上のための科目の開設に向けた指導などが追加された⁶⁾。

また、2016年12月に上海市言語文字工作委员会が公表した「上海市における第13次五カ年計画期の言語文字事業の改革及び発展計画」（滬語委〔2016〕3号）でも、第2章（第13次五カ年計画期の情勢における要求）第4節（多様化に伴う言語文字の管理能力向上の切実な要求）で「多方言・多言語、開放・包容」が上海市の言語生活の顕著な特徴であると述べられ、第4章（重点任务）第2節（地方言語文化の保護及び伝承）では同地の言語文化の保護・伝承が重点的な任務に掲げられており、「上海話の保護」に関する市民感情に配慮し、上海語と普通話の関係を適切に処理すべきであるとの見解も示された。さらに、具体的な施策には、幼稚園での上海語体験活動や、各領域での多方言・多言語によるサービスの提供なども盛り込まれている。したがって、新たな中期計画でも従前の方針が引き継がれ、多方言・多言語の共存というコンセプトや、これに関する施策は健在である。

ただし、その後に公表された「2017年上海市の言語文字事業の要点」（滬語委〔2017〕1号）には、再び大きな変化が認められた。それまで毎年見られてきた上海語又は方言に関する記載が一切存在しなくなったのである。この点に関しては、単年度限りの事象か、あるいは大幅な方針転換が図られたのか、現時点では直ちに判断しがたいところであり、今後の動向を見守っていく必要がある。

Ⅲ. 上海語の使用状況等

2000年代に入って以降、上海市では各種言語の使用状況等に関連する調

査報告の結果が多数公表されてきた。具体的には、行政機関及び政府系研究機関による調査報告として、上海市教育局の孫ほか（2007）、上海社会科学院城市与人口発展研究所（2012）及び上海市統計局（2014）が挙げられ、高等教育機関の研究者による調査報告としても、薛（2009）、房（2010）、林ほか（2015）、湯・原（2016）等が存在している。

各調査報告は、それぞれ目的や質問事項、回答の選択肢等が異なり、一律に比較することは難しいが、総じてインフォーマルな場面での上海語の使用が5割前後に達している一方、若年層ほどその比率が下がる傾向にあることを明らかにしている。また、そもそも言語の使用状況に関する調査が、短期間にこれだけ多く実施されている行政区も他に類を見ないところであり、上海市では官民を問わず言語の使用状況に対する関心度が高いということも窺える。以下では、本報告の内容との関係性が高い薛（2009）の調査結果を確認することとしたい。

薛（2009）は、2008年に公的研究助成を受け、20歳以上の一般市民1,100名（うち有効回答数811件）を対象とし、上海市における言語の使用状況を調査したものである。この調査結果の主要な内容を抜粋し、一覧できるように取りまとめたものが表1である。

表1 薛（2009）の各種言語の使用に関する調査結果

	上海語	普通話	上海語及び普通話	その他方言
幼児期に最初に習得した言語	63.4%	5.7%	11.6%	19.1%
最も流暢に話すことができる言語	60.8%	23.9%		6.3%
家庭で父母とよく使用する言語	58.6%	7.2%	12.3%	18.9%
家庭で父母と最もよく使用する言語	63.7%	9.3%		14.2%
家庭で子女とよく使用する言語	41.7%	8.8%	31.2%	9.1%
家庭で子女と最もよく使用する言語	60.4%	17.6%		5.3%
職場で同僚とよく使用する言語	30.7%	20.5%	41.3%	5.7%
職場で同僚と最もよく使用する言語	52.9%	35.4%		2.5%
買い物で店員と話す際によく使用する言語	24.4%	23.9%	48.0%	2.7%
買い物で店員と話す際に最もよく使用する言語	57.0%	33.3%		1.3%

（薛（2009）に基づき筆者作成。各質問事項につき有効でない回答が一定数存在するため、パーセンテージの合計は100にならない。）

また、薛（2009）は、放送での言語使用に関する調査も実施しており、この結果を取りまとめたものが表2である。

表2 薛（2009）の放送での使用言語に関する調査結果

	上海語	普通話	特になし
ラジオ番組の使用言語で一番好きなもの	19.1%	52.3%	22.4%
	上海語	普通話	その他方言
テレビドラマに配音されている言語で一番好きなもの	15.0%	80.3%	1.7%

（薛（2009）に基づき筆者作成。各質問事項につき有効でない回答が一定数存在するため、パーセンテージの合計は100にならない。）

同表を見れば一目瞭然であるが、普通話のテレビドラマが好まれる傾向がとりわけ顕著であり、これには年齢差が特段認められなかったこととされる。

IV. 上海語放送の実施状況等

本章では、上海市での上海語放送の足跡を辿るとともに、現在の上海語テレビ放送の実施状況を確認する。

1. ラジオ放送

上海語放送の歴史は中華民国期まで遡ることができるが（錢 2007 : 247）、ここでは新中国成立以降の状況を振り返ることとした。

上海市では、1949年5月27日に上海人民広播電台（以下、上海電台）が成立するが、開局当初の使用言語は普通話及び上海語だったとされる（『中国新聞年鑑』1982年版：325）。また、1950年代から1980年代までの上海語ラジオ放送の実施状況に関しては、次のように説明されている。

上海電台は、1950年代滬語放送を実施していた。滬語関係の番組としては、「ニュース」、「評論」、「リスナーサービス」等以外に、「滬語のマーケット情報」及び「滬語のファイナンス情報」があった。1960年代の文化大革命まで、滬語ラジオ放送は依然として数多く存在しており、最も多い時には3チャンネルで滬語番組を放送していた。文化大革命以降も滬語のラジオ放送は幸いにして被害を逃れ、徐々に発展していった。1987年5月まで上海電台の滬語による番組は、全体の約25%を占めていた。（『上海広播電視志』：333）

さらに、巖・鞏（2005）によれば、1980年代中盤の上海電台所属アナウンサー・司会者28名のうち6名が上海語担当であったとされている。

しかし、普通話の普及政策（以下、推普政策）が本格化していくなかで、1987年4月1日には「規定」が発出され、方言放送を減少させていくとい

う国の基本方針が打ち出された。上海語のラジオ放送もこれと無関係とはいかず、いよいよ受難の時期を迎える。各年の『中国広播電視年鑑』に掲載された「国内向けラジオ放送での使用言語の名称」には、1991年まで上海語がリストアップされていたが⁷⁾、1992年からその名称は見られなくなり⁸⁾、その後再び姿を現すことはなかった。ただし、1990年代に入ってから、上海語ラジオ番組が皆無になったという訳ではなく、「阿拉上海人（われら上海人）」（上海東方広播電台）等の新番組が始められたことも認められる（『上海文化年鑑』1997年版：106）。

他方、2000年代後半には、上海語ラジオ放送にまた1つの転機が訪れる。2002年7月15日に全国初の伝統芸能専門のチャンネルとして開設された上海電台演劇・民間芸能チャンネル（AM1197/FM97.2）⁹⁾が、2009年6月8日のリニューアルに伴い、上海語番組が全体の半分以上となるよう変更されたのである（『新聞晨报』2009年6月5日）。

もっとも、この演劇・民間芸能チャンネルに関しては、胡（2012）が曹景行氏——上海市出身のフェニックステレビ（鳳凰衛視）総監——による次のような見解を取り上げている。

目下、上海電台の演劇・民間芸能チャンネルのおよそ半分は上海話による放送であるが、実際のところは、「阿富根」に代表される番組しか正真正銘の滬語ラジオではないという状況である。（胡2012：14）

確かに演劇・民間芸能チャンネルは上海語の番組が主体ではあるが、それらの多くは伝統芸能関連の内容であって、「談天説地阿富根（おしゃべり阿富根）」や「開心6 + 1（ハッピー6 + 1）」等の一般的な上海語トーク番組は基本的に週末に配されているだけである¹⁰⁾。

2. テレビ放送

(1) 従前の経緯・経過

上海市では、1958年10月1日に上海電視台が設立され、テレビ放送の時代が始まる（『上海広播電視志』：44）。しかし、その後は文化大革命の影響もあり、実際一般家庭に広くテレビが普及するのは、改革開放以降のこととなる。

1980年代当時の上海語テレビ放送に言及した資料は少ないが、『中国広播電視年鑑』1986年版に掲載された「江蘇電視台の視聴者の状況に係る調査報告」には、次のような一節が認められる（以下〔 〕は引用者）。

さらに、これらの地域〔＝蘇州市、無錫市及び常州市（蘇南）〕は、呉語圏及び上海経済圏に属しており、上海の影響を大きく受けていることから、人々は上海のテレビ番組を視聴することが習慣となっている。上海電視台は、蘇南人の視聴に適した方言番組も一部制作しており、このエリアの視聴者にとって比較的大きな魅力を有している。（『中国広播電視年鑑』1986年版：577）

この記述からは、1980年代中盤、上海電視台により上海語テレビ放送が行われていたことが分かる。

1990年代中盤から2017年までに上海市で放送された主な上海語テレビ番組（専ら伝統芸能を取り扱うものを除く。）を取りまとめたものが表3である¹¹⁾。同表を一瞥する限り、上海語テレビ番組の全体的なタイトル数は比較的多いようにも思われる。

表3 1990年代以降の上海市における主な上海語テレビ番組一覧

開始時期	ジャンル	タイトル	テレビ局 (チャンネル)
1994年	バラエティ	智力大衝浪	上海 (8)
1995年	ドラマ (情景劇)	老娘舅	東方
		七彩哈哈鏡	有線
	ドラマ (連続作品)	孽債	上海
1996年	ドラマ (連続作品)	兒女情長	東方 (20)
1997年	ドラマ (連続作品)	奪子戦争	東方 (20)
		何須再回首	東方 (20)
		走過冬天的女人	東方
1998年	ドラマ (情景劇)	阿木林	東方 (演劇)
		紅茶坊	東方 (演劇)
2001年	ドラマ (情景劇)	新上海屋檐下	有線 (映画・ドラマ)
2002年	ドラマ (情景劇)	老娘舅の兒孫們	東方 (娯楽)
		喜劇一籬筐	東方 (演劇)
2003年	ドラマ (情景劇)	開心公寓	東方 (文芸)
2004年	情報バラエティ	三人麻辣燙	東方 (演劇)
	トーク	可凡傾聽	東方 (文芸)
	ドラマ (情景劇)	從頭開始	東方 (文芸)
		縁来一家門	東方 (演劇)
2007年	情報バラエティ	新娯楽在線	東方 (娯楽)
	ドラマ (実話短編)	百家心	東方 (娯楽)
		百家心・阿慶講故事	東方 (娯楽)
2008年	情報バラエティ	36.7℃明星聽診会	東方 (娯楽)
		新老娘舅	東方 (娯楽)
	ドラマ (情景劇)	噓占上海灘 (啼笑往事)	東方 (娯楽)
		開心喜福会	東方 (娯楽)
	バラエティ	笑林大会	東方 (娯楽)
2009年	アニメ	老娘舅 (動漫版)	東方 (娯楽)
	情報バラエティ	幫女郎	教育
		万家灯火	教育
		柏万青和諧熱線	東方 (娯楽)
		新娯楽在線	東方 (娯楽)
	バラエティ	快樂三兄弟	東方 (娯楽)
		新智力大衝浪	東方 (娯楽)

中華人民共和國上海市における上海語テレビ放送と言語政策

2010年	情報バラエティ	一呼拍応	上海（娯楽）
	バラエティ	歓楽星期二	上海（娯楽）
2011年	情報バラエティ	甲方乙方	上海（スター）
		新老娘舅・新老娘舅微博	上海（娯楽）
	ドキュメンタリー	上海故事	上海（ニュース総合）
	ドラマ（吹替作品）	愛情公寓	上海（ドラマ）
2012年	トークショー	悦悦一口舒	上海（娯楽）
	ニュース	新聞坊（週末版）	上海（ニュース総合）
	バラエティ	楽来越開心	上海（娯楽）
2013年	アニメ	滑稽王小毛	上海（少年・児童）
	ドラマ（吹替作品）	保姆	上海（ドラマ）
		断奶	上海（ドラマ）
		婆婆來了	上海（ドラマ）
		月嫂	上海（ドラマ）
	ドラマ（情景劇）	老房新客	上海（娯楽）
ニュース	大家帮農忙	上海（ニュース総合）	
2014年	トークショー	嘎訕胡	上海（娯楽）
	ドキュメンタリー	閑話上海灘	上海（ドキュメンタリー）
	ドラマ（情景劇）	哈哈笑餐厅	上海（ドラマ）
	バラエティ	儂最有腔調	上海（スター）
2015年	情報バラエティ	我們退休啦	上海（娯楽）
	ドラマ（情景劇）	謎案大世界	上海（ドラマ）
		老洋房的笑故事	上海（ドラマ）
バラエティ	阿拉乒乓響	上海（娯楽）	
2016年	ドラマ（情景劇）	七十二家房客（賀歳劇）	上海（ドラマ）
2017年	ドラマ（情景劇）	哈哈笑餐厅2	上海（ドラマ）

（『東方早報』（2005年11月9日、2012年1月6日）、『解放日報』（2004年4月5日、2013年6月14日、2014年8月13日、2017年2月15日）、『労働報』（2004年2月3日）、『上海青年報』（2012年4月16日、2014年8月12日）、『文匯報』（2001年9月9日、2007年12月13日）、『新民晚報』（2004年7月26日、2005年3月9日、2012年4月12日、2012年5月4日、2013年7月30日、2014年12月30日、2015年5月4日、2015年6月29日、2017年3月9日）、『新聞晨报』（2009年1月23日、2011年8月23日、2012年4月12日、2013年9月2日、2013年9月9日、2013年9月27日、2015年7月2日）、陳（2016）、褚（2011）、胡（2013）、賈・張（2017）、劉ほか（1995）、林・顧（2000）、上海文広新聞伝媒集団節目資料中心（2008）、上海文化広播影視集団有限公司（2014）、上海文広新聞伝媒集団（2008）、沈（2016）、王（2010）、王（2012；2014）、趙（1996）、周（2014）、資・肖（2011）、『中国広播電視年鑑』（1986～2016年版）及び『上海文化年鑑』（1997；2004）に基づき筆者作成。テレビ局の名称は、「上海：上海電視台」、「東方：上海東方電視台」、「有線：上海有線電視台」、「教育：上海教育電視台」である。なお、2001年に上海電視台と上海東方電視台は他の放送局とともに合併し、2010年以降は名称も「上海電視台」に統一されている。）

しかし、上海語によるテレビ放送は、これまで決して順風満帆ではなかった。1987年の「規定」により、上海語テレビ放送も当然ながら制限を受けることとなったからである。本件に関しては、次のような指摘もある。

実際、1990年代以前は、テレビ・ラジオ局が上海語で制作したニュース番組やバラエティ番組がわりと一般的であったが、1990年代に入ってからこの領域の規定は日増しに厳しいものとなっていった。（『東方早報』2012年1月5日）

それでも1990年代中盤には上海語によるドラマが一世を風靡した。1995年の「孽債（罪深き借り）」は、葉辛による同名の小説¹²⁾を原作としたドラマ作品であり、上海語を主たる使用言語としたが、当時の最高視聴率を記録しただけでなく、雑誌・新聞で特集が組まれ、さらには関連団体による研究討論会も行われた（銭2005；兪1995）。

こうした「孽債」の成功により、上海語ドラマの増加に向けた機運も高まりを見せたが、かかる傾向を問題視した当局により規制が発動される事態となった。すなわち、1996年に放送された「児女情長（男女の深き情）」は、開始当初、上海語版が放送され非常に人気を博したものの、全体の半分が放送された時点で普通話版に切り替えられ、視聴率が下降した（『解放日報』2013年6月14日）。また、1997年の「何須再回首（もう振り返ることはない）」に関しては、次のような動きがあった。

※滬語ドラマ「何須再回首」が上海で放送中止に

上海市言語文字工作委员会は、1997年3月14日に拡大全体会議を開催し、言語文字事業を法制管理の軌道に乗せることを求めた。同会議では、滬語テレビドラマ「何須再回首」の放送中止を決定した。副市

長兼言語文字工作委員会主任の龔学平氏は、「『何須再回首』は普通話版しか放送してはならないこととしたが、これは規律として今日決めたことである。テレビを滬語でやることは奨励しない!」と強調した。(『中国語言学年鑑』1995-1998年版:794-795)

その後、上海語の連続ドラマはすっかり姿を消してしまったが¹³⁾、「情景劇」と呼ばれるシチュエーションコメディは生き残った。しかし、上海語による情景劇は、次の通り、一部に良好な成績を収めた作品もあったものの、大方は短命であった(以下〔 〕は引用者)。

上海の地元「海派〔=上海流〕」情景劇は、伝統芸能である滑稽〔=長江デルタ一帯に見られる民間伝統芸能〕とテレビというメディアとが融合したものであり、12年の輝かしい歴史を有する「老娘舅(世話焼き年配者)」はその元祖である。そしてその後、「紅茶坊(ティーアレイ)」、「縁来一家門(ゆかりの一家)」、「新上海屋檐下(新・上海の軒下)」、「阿木林(まぬけもの)」、「七彩哈哈鏡(カラフルなマジックミラー)」、「喜劇一籬筐(コメディーバスケット)」、「開心公寓(ハッピーホテル)」等、このジャンルの作品が続々と現れたが、キャストの多くは元々滑稽の俳優であり、ストーリーに新味はなく、クオリティも低いことから、「開心公寓」と「老娘舅」以外はすぐに幕を閉じていった。(王2010:31-32)

こうした状況は、2010年代に入っても変わることはなく、2011年には「噓占上海灘(上海ストーリー)」が視聴率の不振で終了することに伴い、当該ジャンルの番組すらも完全に消滅する事態となった(『新聞晨報』2011年1月15日)。この空白期間は、2013年に「老房新客(古い家と新しい客)」がスタートするまで実に2年半以上続くこととなる(『新聞晨報』2013年9月2日)。

さらに、2010年代には、普通話の連続ドラマに上海語音声吹き替えを試みもなされたが、ことごとく失敗に終わった。具体的には、まず2011年8月に「愛情公寓（ラブアパートメント）」の上海語吹替版が放送されたが、成績不振により僅か5回で打ち切りとなった（『新聞晨报』2011年8月23日）。つぎに、2013年にも再度「断奶（離乳）」などの4作品が上海語に吹き替えられ、翌年には更に10作品の上海語版ドラマが投入される予定とされていた（『新聞晨报』2013年9月2日）。しかし、2014年になって上海語吹替えドラマが放送されたという情報は確認できない。

上海語のニュース番組も定着することはなかった。中国では、2004年にスタートした「阿六頭説新聞（阿六頭がニュースを話す）」（杭州電視台）の成功により、全国的に方言ニュース番組が広まりを見せた。こうした流れを受けてか、上海市でも2006年から上海電視台ニュース総合チャンネルで「書報亭（ニューススタンド）」という上海語ニュース番組がスタートする予定だったようである（『東方早報』2005年11月9日）。

しかし、『新聞晨报』（2012年6月20日）は、2006年に上海語ニュース番組の準備が進められたものの、それが日の目を見ることはなかったと報じている。そして実際、次の通り、本件に関連するものと見られる当局の動向も確認できる。

アナウンサー及び司会者が普通話を話す良好な雰囲気を提供するため、本市の文化ラジオ・映画・テレビ管理局は、みだりに滬語の番組を設け、又は普通話の番組中で滬語を話す内容を増加させることのないよう、市内の放送メディアに対して何度も注意喚起するとともに、関係チャンネルが滬語で原稿を読むニュース番組を設けるという意見を明確に否定した。（『上海信息化年鑑』2006年版：378）

このように当局の指導により一度頓挫した上海語ニュース番組ではあるが、しかるに2012年6月には放送10周年を迎えた「新聞坊（ニュースアレイ）」の土曜日放送分が上海語版とされることとなった（『新聞晨报』2012年6月20日）。この上海語版の「新聞坊」は、開始当初、平日の普通話版を超えるほどの視聴率であったとされる（胡2013）。しかし、上海語版「新聞坊」は、普通話の使用も相当程度に及んでいたことから、高視聴率も長くは続かず、その後2013年10月6日からは、全面的に上海語を使用したニュース番組「大家幫儂忙（みんなであなたをお助けします）」がスタートした（『新聞晨报』2013年9月27日）。ただし、同番組も2016年1月に事実上終了し¹⁴、現在は毎日「新聞坊」の後半に上海語を使用する5分程度の「大家幫儂忙」というコーナーが設けられているだけである。

各種バラエティ番組などでも、上海語が使用されているものが一定程度放送されてきた。しかし、上海語のバラエティ番組などに対しては、胡（2012）が前出の曹景行氏による次のような意見を取り上げている。

……上海では方言のみによる番組はほとんど空白状態であり、例えば「新老娘舅（新・世話焼き年配者）」、「百家心（庶民の心）」、「快樂三兄弟（愉快な三兄弟）」、「新智力大衝浪（ニューインテリジェンスサーフィン）」等は、司会者が滬語も話してはいるが、滬語と普通話の割合が各50%ずつであり、純粋な方言番組と見做すことはできない。（胡2012：14）

以上のように、上海市における上海語テレビ番組は、1980年代から放送されており、1990年代中盤には一部ドラマ作品が時代を席捲したものの、しかしそれゆえに当局が取締りに乗り出す事態となり、その後の状況は総じて芳しいものではなく、今まで不安定な低空飛行を続けてきたのであった。

(2) 現状

現在の上海電視台における上海語テレビ放送の状況を確認したい。同台では、主として娯楽チャンネルで上海語番組が放送されている。2017年10月20日（金）に筆者が視聴した結果¹⁵⁾を取りまとめたものが表4である。

表4 上海電視台娯楽チャンネルの使用言語（2017年10月20日）

時刻	番組名	使用言語
6:00	36.7℃明星聽診会（488）	普通話／上海語
6:58	新娛樂在線	普通話／上海語
8:01	嘎訥胡（2690）	上海語
9:30	我們退休啦（643）	普通話／上海語
10:11	陳蓉朋友圈（534）	普通話
11:15	36.7℃明星聽診会（488）	普通話／上海語
12:27	新娛樂在線	普通話／上海語
13:30	阿拉乒乓響（41）	普通話／上海語
14:41	嘎訥胡（2690）	上海語
16:13	陳蓉朋友圈（534）	普通話
17:00	我們退休啦（644）	普通話／上海語
17:30	淘最上海（2077）	普通話
17:57	36.7℃明星聽診会（488）	普通話／上海語
18:57	嘎訥胡（2691）	上海語
20:27	超級家庭（172）	普通話
21:27	新娛樂在線	普通話／上海語
22:27	嘎訥胡（2691）	上海語

（視聴結果に基づき筆者作成）

表4の通り、同日は「嘎訥胡（おしゃべり）」のみが上海語を主体とする番組であり、「36.7℃明星聽診会（36.7℃スター診療所）」、「新娛樂在線（ニューエンタメオンライン）」、「我們退休啦（我ら定年だ）」及び「阿拉乒乓響（わたしたちってすごい）」は、普通話を主体としつつ上海語を適宜挿入して進行するスタイルであった。また、「陳蓉朋友圈（陳蓉の交友圏）」に関しては、

同日はゲストの関係から終始普通話で使用されていたが、別の日に放送された動画を視聴すると、上海語が使用されている回も認められた。さらに、「淘最上海（キャッチアップ上海）」では、タイトルコールが上海語でなされている。

なお、娯楽チャンネル以外では、ニュース総合チャンネルの一部番組で上海語の使用が確認された。例えば、既述した「新聞坊」最後のコーナー「大家幫儂忙」では、取材インタビューの大半が上海語によるものであり、キャスターも部分的に上海語を使用している。また、ドキュメンタリーの「上海故事（上海の物語）」は放送回によって異なるが、インタビューの大半が上海語であることも少なくない。

上記の通り、上海電視台で放送されている番組のうち、上海語を主体としたものは僅少である。また、上海語と普通話を混用するスタイルの番組が高い比率を占めていることは、上海電視台による方言番組の特徴として指摘されるとともに、これは現在の上海市における言語の使用状況を反映した演出とも捉えられる。

V. 考 察

本章では、上海市における上海語テレビ放送をめぐる事象を考察する。

1. 推普政策下の上海語テレビ放送

前章で確認した通り、上海市では、1980年代から上海語のテレビ番組が存在していたと見られる。この点は、2000年代中盤に入ってから初めて省級・市級のテレビ局が方言番組を放送するようになった近隣の浙江省及び江蘇省とは状況が大きく異なっている（小田 2016b; 2017a）。この要因としては、長年に亘る上海語ラジオ放送で培った番組制作のノウハウや、滬劇・滑稽などの伝統芸能の実力、そして当地の人々の地元方言に対するプライ

ドなどが考えられる。

他方、1990年代の上海市のメディア事情で見逃すことができない事象としては、テレビ局の新設による競争環境の形成が挙げられる。同市では、1993年1月18日に新たに上海東方電視台が開設され、既存の上海電視台とともに省級テレビ局が2つ存在する当時全国で唯一の行政区となった。このような措置は、競争メカニズムの導入を目的としたものと説明されており（『上海広播電視志』：381）、同市の狭いエリア内で2つのテレビ局に限られたパイの奪い合いを繰り広げるような状況が生み出された結果、各局が独自色を打ち出し、番組制作に工夫を凝らすことが求められるようになったのである。

こうした時勢のなかで、1995年に上海電視台が「孽債」を投入したことは、いわば必然の流れであった。すなわち、同台がテレビの花形である連続ドラマ作品の制作に当たり、小説を原作とする優れた脚本を用意し、リアリティの演出や目新しさを期待して上海語を使用したことは、2つの省級テレビ局がそれぞれ複数のチャンネルを擁するなかで、他者との差別化を図るという観点からするに、至極自然な成り行きだったと解すべきである。

しかし、当時はすでに「規定」の適用下であり、この3項は次のように定めていた。

第3項 映画及びテレビドラマ（地方劇を除く。）は、普通話を使用するものとし、方言を濫用してはならない。指導者を演じる役者は、劇中にて通常普通話を話さなければならない。作品内容の必要性から方言を使用する場合は、過度に使用してはならない。方言を使用した映画及びテレビドラマの数量は、抑制しなければならない。

また、1992年には推普政策の関係文書である「当面の言語文字事業に関する指示に係る伺書」（国発〔1992〕63号）でも、改めて方言で放送する時間及び番組を減少させることが求められた。さらに、1980年代に推普政策が再開・本格化して以降、特に重視されてきたのが南方方言区であり¹⁶⁾、上海市は同地区にあって唯一の直轄市として、当該政策の実施面でも優等生として振る舞うことが期待されていたように思われる。

このような状況下において、上海市当局としては、「孽債」の成功をもてはやす風潮を看過することはできず、そしてまた「規定」をはじめとした各種規範を遵守しなければならないという意識も当然働いたことであろう。それゆえ後続の「児女情長」や「何須再回首」の上海語版は放送中止にまで追い込まれ、その後上海語による連続ドラマ作品は絶滅してしまったのである。

さて、ここまで見てきた一連の経緯・経過を整理すると、次のような構図が見出せる。すなわち、①テレビ市場の商業化に伴い、競争環境が生み出され、②テレビ局が差別化を図るために本来「禁じ手」であるはずの方言の使用に踏み切り、③その狙いが功を奏し、高視聴率を記録したことによって、④これに続けとばかりに方言番組が増加することとなったが、⑤かかる状況を許容しがたい当局が規制に乗り出してきた、というものである。そして、この①～⑤の展開は、2000年代に起きた方言番組ブームとこれに関連する諸動向を先取りしたものといつてよい。つまり、先進都市たる上海市では、テレビ市場の競争環境の形成に伴う方言番組ブームが全国に先駆けて、しかも10年も早く訪れていたということである。

2000年代の全国規模のブームでは、当局から規制通知が発出されたものの、最終的には各地で方言番組がある程度の定着を見せた。この背景には、放送領域での方言使用を例外的に許容する「法」の条文やこれを根拠とする許可制度の導入など、行政法制の整備の進展が認められる（小田2016b；

2017a)。一方、「孽債」がヒットした当時、テレビ局が援用できるような法的枠組みはまだ存在せず、1997年に制定される「条例」にも方言使用の例外に係る規定は設けられていなかった。そして、上海市は小規模な行政区であるがゆえに、各テレビ局に当局のオペレーションが十分に行き届き、もって上海語番組興隆の芽は完全に摘み取られることとなった。

その後、上海市では、伝統芸能の滑稽を現代風にアレンジした情景劇などの上海語テレビ番組が恩恵的に放送を認められてきたが、こうした番組は必ずしも常に当地の人々の支持を広く集めることができていた訳ではなかった。また、従前方言番組が放送されてこなかった地域とは異なり、細々とではあれ放送が続けられてきた上海語テレビ番組は、当地の人々にとってすでに一応は見慣れたものとなっており、殊更目新しいものとして脚光を浴びるようなこともなかった。

それゆえ、2000年代の全国的な方言番組ブームの際も、上海市の状況は落ち着いたものであった。確かに2005年頃には、いくつかの上海語情景劇が比較的高い視聴率を獲得していたが¹⁷⁾、これは全国的な方言番組の興隆に呼応・連動した現象というよりは、それまで続いてきた作品の一部が偶々人気となり、その時期が丁度ブームの頃に重なり合っていたと捉えた方が適当と思われる。そして、それよりもむしろ注目すべきは、そうした情景劇でさえ一時放送の空白期間が生じていた点や、全国各地で流行した方言ニュース番組も長続きしなかった点、上海語吹替えのドラマが試行的に導入されるも定着することはなかったという点であろう。薛（2009）の調査結果もその傍証であるが、上海語テレビ番組は、もはや当地の多くの人々にとって日常必需品ではなくなってしまったのである。

2. ポスト推普政策時代の上海語テレビ放送

中国では、建国後1950年代に推普政策が始められた。1958年1月に周恩

来総理が行った「当面の文字改革の任務」¹⁸⁾という報告では、推普政策が方言間の障壁を解消するためのものであり、方言を禁止・消滅させることは企図していない旨が表明された。そして、その後も推普政策の関係文書では、同様の説明が事あるごとに繰り返されてきた。

この点に関して、上海市では、滬語委〔2006〕7号に「社会において人々が交流する際の方言の障壁は基本的に解消している」という見解が示され、滬語委〔2016〕3号文書では、この見解に加えて更に直截的に「普通話が高次に普及して」いるとまで述べられており、かつて掲げられた推普政策の目標は、今日もはや達成されたといって差支えない状況にある。また、各文書には、普通話に関する政策の目標が「普及」から水準の「向上」の段階に移行している旨の記述も認められる。つまり、上海市はすでにポスト推普政策時代に突入しているのである。

こうした状況は、従前、推普政策——時として上海語の使用制限を伴う——が強力に推進されてきた成果にほかならない。銭（2005）は、一時期上海市のマスメディアなどで上海語の使用が厳しく禁じられていたと指摘しているが、この内容は上海語ドラマの規制とも平仄の合うものである。また、王ほか（2013）は、1992年以降、学校で普通話の使用が徹底されるとともに、上海語を使用すると減点処分されていたと記述している。

しかし、かくして普通話が普及した一方、2000年代中盤には上海語の衰退を危惧する声が高まり、2004年から2005年にかけての中国人民政治協商会議上海市委員会（以下、上海政協）及び上海市人民代表大会での上海語の保護に関する提案・議案は7件にも上った¹⁹⁾。第11次五カ年計画期の滬語委〔2006〕7号文書に「多方言・多言語」といったコンセプトが盛り込まれた背景には、こうした動向が存在していたのである。

そして、その後も上海語の保護を訴える各界の動きは確認することができ、2011年には上海市語文学会が「上海話の科学的な保護に関する提案

書」²⁰⁾を公表し、教育機関、交通機関及び放送機関での上海語の使用、並びに書記言語としての上海語の使用に関する提案を行った（『東方早報』2012年1月5日）。また、2012年にも中国農工民主党上海市委員会の委員が上海政協で「滬語文化伝承のための良好な環境の創造」²¹⁾に関する提案を行っている（『聯合時報』2012年6月12日）。

こうした情勢のなかで、上海語テレビ番組をめぐる政策は、今後どのようになっていくのだろうか。現在、上海市では、既述した事業計画等に基づき、上海語の保護に関する取組みが各種行われている。また、方言を含む多言語を使用・学習するのに適した環境を整備するためには、諸領域での各種取組みが求められるところであり、そこで放送が果たす役割もまた小さくはないように思われる。そして、現に「上海話の科学的な保護に関する提案書」にも、3項として「上海のラジオ局及びテレビ局が上海話チャンネルを開設し、上海方言により上海のニュース番組及び生活・文化番組を放送すること」及び「その他の放送局も上海話を使用した番組を適宜増加させること」が盛り込まれている（『東方早報』2012年1月5日）。

このような状況を踏まえると、上海語テレビ放送の拡大もなされてよさそうであるが、事態はそう単純ではない。上海市の隣には、2000年代に方言番組が興隆し、二度に亘って規制通知が出された浙江省が存在している（小田2016b）。全国的に見れば、「方言の障壁は基本的に解消した」と自信をもって表明できる行政区は未だに稀有な存在であり、南方方言区では依然として普通話の「普及」に向けて努力を払っている行政区の方が多いように思われる²²⁾。こうした状況下で、上海市——他所の一步先を行く推普政策の優等生——において、方言番組の規制緩和が図られたならば、これが他の行政区に誤解を与え、あるいは故意に参照・模倣されるようなことも懸念される。このように考えるならば、同市で上海語放送の自由度がすぐさま飛躍的に高まるような状況は予想しがたい。

また、肝腎の上海語テレビ番組の需要・人気は、従前の調査結果や放送実績からして高いものとは判断できず、テレビ局が主体的・積極的に放送の拡大を図ることもないだろう。さらに、国家の悲願である台湾統一工作の一環として特例措置が講じられている福建省の泉州電視台閩南語チャンネルでさえ基本的に公的な資金援助がなされていないことに鑑みれば（小田2016a）、上海市が上海語番組の制作・放送を経済的に支援するといったことも難しいように思われる。

ただし、上海市は「多方言・多言語」といった新たな言語政策のコンセプトを掲げ、今正にその実現に向けた施策を模索していると見られる。このような時期には、その後の状況の変化に繋がるような萌芽的な取り組みや、従前とは大きく異なる革新的な手法が導入される可能性もある。また、普通話による番組で方言を時折使用するような演出は、従前、規制通知²³⁾で不適切なものとして取り扱われてきたが、現在の上海電視台娯楽チャンネルのように普通話と上海語を混用した番組の放送が続けられることにより、方言番組とそうでない番組との垣根が徐々に取り払われ、それが緩やかな形で規制緩和に結びついていくという展開も想定することができそうである。

VI. 結 論

本稿の結論は、次の通りである。

- ①上海市では、1980年代から上海語テレビ番組が存在し、テレビ市場の競争が高まりつつあった1990年代中盤には上海語ドラマ「孽債」が放送され一世を風靡した。
- ②しかし、続く上海語ドラマは当局の規制により放送中止とされ、その熱気は失われてしまい、その後今日に至るまで上海語テレビ番組は不安定な状態が続いてきた。

③現在、上海市はすでにポスト推普政策時代に突入しているが、諸般の事情に鑑みるならば、上海語テレビ番組が直ちに増加・拡大するというビジョンは想定しがたい。

④ただし、今後の中国の言語政策を展望するうえで、時代の最先端を行く上海市の動向は重要な意味を有するものと捉えることができ、引き続き注視していく必要がある。

方言番組ブーム発生の経緯・経過は、1990年代の上海市と2000年代の全国各地で基本的に同じ構造であったが、その範囲・規模や法整備の状況などの相違により、その後の展開はそれぞれ異なるものとなった。上海市の早すぎた方言番組ブームは、当局の取締りによって鎮静化が図られ、以後再びブームというべき状況が訪れることはなかったのである。

しかしながら、2000年代の方言番組ブームに対して、上海市や上海語テレビ番組が果たした役割が皆無であったかといえ、決してそういう訳ではないと思われる。上海市は、台湾及び特別行政区（旧植民地）といった特殊な地域との結びつきが強い福建省及び広東省とは異なり、方言放送が許可されうるような理由・建前を持ち合わせてはおらず、そのうえ南方方言区で唯一の直轄市として推普政策の面でも模範的役割を果たしてきたが、されど上海語テレビ番組はどうか一貫して放送が続けられてきた。こうした事実が他の行政区で方言番組が始められる契機に繋がった可能性は大いに指摘されるところであり、例えば、方言番組が勃興した浙江省では、2003年に浙江電視台で方言による短編ドラマ「杭州佬（杭州人）」が始められたが（『南方周末』2005年11月10日）、隣接する上海市で上海語の情景劇の放送が続けられてきたことが参考事例となり、テレビ局における番組の企画や、当局における放送許可の判断に少なからず影響を及ぼしたと考えても、あながち不合理ではないだろう。

今、上海市は、中国国内でもいち早くポスト推普政策時代に突入し、「多

方言・多言語」という次なるステージに向けて歩み出している。今後は、掲げられたコンセプトの本気度が本当のところどの程度のものであって、これに関連する取組みがいかに実施され、かつまたその成果がどうなっていくかに注目していくべきであり、上海語テレビ番組をめぐる政策もこれらに合わせて色と形を変えていくものと予想される。そして、同市の諸動向を考察するに当たっては、周辺の行政区などはもとより、おそらく言語政策に関する同系統の課題を少なからず抱えていると思われる中国語圏の大都市、例えば台北市やシンガポール共和国等との比較検討も有益と思われる。

[謝辞]

本稿は、第41回社会言語科学会研究大会（2018年3月11日、於・東洋大学）でのポスター発表「中華人民共和国上海市における上海語テレビ放送をめぐる政策」に更なる研究を加え、再構成したものである。当日は複数の先生より貴重なご意見をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

注

- 1) 本稿にいう「法令」とは、中華人民共和国立法法（主席令31号）2条に規定される各階層の法令のことを指す。
- 2) 行政機関等が発出する通知、意見、決定等の文書であり、一定の拘束力を有する。
- 3) 「城市語言文字工作評估」。
- 4) 「關於上海市語言文字工作的評估報告」（2004年3月26日）。
- 5) 「上海市語言文字工作要点」。
- 6) 「2013年上海市の言語文字事業の要点」（滬語委〔2013〕1号）、「2014年上海市の言語文字事業の要点」（滬語委〔2014〕2号）及び「2015年上海市の言語文字事業の要点」（滬語委〔2015〕1号）。
- 7) 『中国廣播電視年鑑』1992-1993年版（p.675）。
- 8) 『中国廣播電視年鑑』1992-1993年版（p.684）。
- 9) 上海電台（東方廣播網）戯曲廣播「頻率介紹」（<http://www.fm972.cn/>）（最

終閲覧2018年3月3日)。

- 10) 上海電台(東方廣播網)戯曲広播 (<http://www.fm972.cn/>) で2018年2月から3月にかけて筆者が聴取した結果に基づく。
- 11) 表中には途中で放送中止となった作品も含んでいる。チャンネルは分かる限りのものを付記した。
- 12) 葉辛(1995)『孽債』貴州人民出版社。
- 13) 「孽債」の上海語版が再放送されたのは、ようやく2005年に入ってからのことである(『新聞晨报』2005年6月25日)。
- 14) 微博(Weibo) STV 大家帮依忙「我們要搬家啦!(2015年12月29日)」(<https://weibo.com/p/1001603925431957996194>) (最終閲覧2018年3月3日)。
- 15) 上海廣播電視台「節目表」(https://www.smg.cn/review/tv/201710/yl_1020.html) に掲載の番組表及びPPTV聚力HD(Android版) Ver.3.0.2により番組を視聴した。
- 16) 1980年代後半以降、「南方方言区における推普関係事業の経験交流会」(1987年11月3~6日、於・福建省)や「南方方言区における推普関係事業フォーラム」(1993年6月22~26日、於・広東省)などが実施されており、南方方言区における推普政策の実施に特に注力していたことが窺われる(『語文建設』編集部1987;1993)。
- 17) 例えば、上海市のテレビドラマの視聴率データ(2005年9月1日~30日)では、「老娘舅和兒孫們(世話焼き年配者とこども・孫たち)」が1位(12.8%)、「開心公寓」が7位(5.9%)である(河南省統計信息咨询中心2005)。
- 18) 「当面文字改革的任務」(1958年1月10日)。
- 19) 「關於『上海市實施“中華人民共和國國家通用語言文字法”弁法(草案)』的說明」(2005年9月22日)。
- 20) 「關於科學保護上海話的倡議書」。
- 21) 「為滬語文化傳承創造良好環境」。
- 22) 管見の限り、現時点で政策文書に「方言の障壁は基本的に解消している」と記載されている事例は存在しない。また、各省・自治区では「都市における言語・文字に関する事業の評価」のⅢ類都市(県級行政区)の評価が依然として進行中であり、少なくとも制度上「普通話が普及初期段階」に達しているということとはできない(小田2017b)。
- 23) 具体的には、「中国のラジオ・テレビのアナウンサー・司会者の自律規約」(2005年8月26日中国廣播電視協會)や「ラジオ・テレビ番組の規範的な言語使用による普通話の普及に関する通知」(広発〔2013〕96号)が挙げられる。

参考文献

〔邦文〕

- 小田格 (2016a) 「中華人民共和国福建省南部における閩南語テレビ放送について—対台湾政策下における特例措置」『言語政策』12号
- 小田格 (2016b) 「中華人民共和国浙江省における方言番組と政策変容—新旧の關係通知をめぐって」『中国研究月報』70巻8号
- 小田格 (2017a) 「中華人民共和国江蘇省における方言番組とその規制—關係通知の策定背景及び運用実態を中心に」『中国研究月報』71巻2号
- 小田格 (2017b) 「言語政策と評価に関する一考察—中華人民共和国の『都市における言語・文字に関する事業の評価』制度を事例として」『人文研紀要』86号
- 小田格 (2018) 「中華人民共和国広東省珠江デルタにおける広東語テレビ放送をめぐる政策—方言放送特区の成立、経過及び展望—」『社会システム研究』21号
- 章蓉 (2009a) 「中国都市テレビ局の『新型』方言ニュースの革新—ハーバーマスの『政治的公共圏の等価物』概念の検証—」『東京大学大学院情報学環紀要情報学研究』No.77
- 章蓉 (2009b) 「中国の方言ニュースが面白い」『放送レポート』220号

〔中文〕

〔論文, 単著, 年鑑等〕

- 陳天許 (2016) 「浅談傳統電視欄目向新媒體的轉型」『新聞傳播』2016年17期
- 褚雪梅 (2011) 「海派情景劇的緣起緣滅」『上海戲劇』2011年5期
- 房娜 (2010) 「上海市小学生上海話和普通話語言態度研究」『上海青年管理幹部學院學報』2010年2期
- 龔孝雄 (1997) 「“海派”電視硝煙未盡熒屏爆發『奪子戰爭』」『中国電視戲曲』1997年5期
- 河南省統計信息諮詢中心 (2005) 「CSM 媒介研究部分城市電視劇收視TOP10」『市場研究』2005年11期
- 胡凌虹 (2012) 「從“漢語危機”到“滬語危局”」『上海采風』2012年5期
- 胡任華 (2013) 「試論電視民生新聞節目的微創新—『新聞坊』滬語版的探索」『新聞記者』2013年3期
- 賈月・張瀟芸 (2017) 「方言類電視欄目的發展空間探析—以『新老西兒諷吧』為例」『伝媒』2017年10期
- 林連通・顧士熙主編 (2000) 『中国語言學年鑑 (1995-1998) (上)』語文出版社
- 林元彪・張日培・孫曉先 (2015) 「上海市語言文字应用能力及使用狀況調查報告」『語言政策与語言教育』2015年1期
- 劉大為・金立鑫・黃錦章 (1995) 「從『孽債』的滬方言談起……」『修辭學習』1995

年3期

- 錢乃榮 (2005) 「論語言的多樣性和“規範化”」『語言教學與研究』2005年2期
- 錢乃榮 (2007) 『上海方言』文匯出版社
- 『上海廣播電視志』編輯委員會編 (1999) 『上海廣播電視志』上海社會科學院出版社
- 上海社會科學院城市與人口發展研究所 (2012) 『2012年上海市中小學生成長情況最新調查報告』上海社會科學院城市與人口發展研究所
- 上海市人大教科文衛委員會·上海市人大法制委員會·上海市人大常委會法制工作委員會·上海市人民政府法制辦公室·上海市教育委員會·上海市語言文字工作委員會 (2006) 『『上海市實施「中華人民共和國國家通用語言文字法」弁法』學習讀本』上海教育出版社
- 上海市統計局 (2014) 『2013年上海市民語言应用能力調查報告』上海市統計局
- 上海文廣新聞傳媒集團編 (2008) 『上海電視欄目志 (1958-2008)』新世界出版社
- 上海文廣新聞傳媒集團節目資料中心編 (2008) 『上海電視欄目志 (1958-2008)』上海文廣新聞傳媒集團節目資料中心上海音像資料館 (草案段階の内部資料版)
- 上海文化廣播影視集團有限公司編 (2014) 『上海電視欄目志 (2008-2013)』學林出版社
- 『上海文化年鑑』編纂委員會編 (1997; 2004) 『上海文化年鑑』(1997, 2004年版) 中國大百科全書出版社
- 『上海信息化年鑑』編纂委員會編 (2006) 『上海信息化年鑑』(2006年版) 上海科學技術文獻出版社
- 沈小茲 (2016) 「冷眼看客嘍訕胡」『檢察風雲』2016年24期
- 孫曉先·蔣冰冰·王頤嘉·喬麗華 (2007) 「上海市學生普通話和上海話使用狀況調查」『長江學術』2007年3期
- 湯紫丹·原蘇榮 (2016) 「新一代中小學生上海話使用現狀的調查研究」『文教資料』2016年34期
- 王悅陽·趙化南·錢乃榮·王琪森·沈善增·楊劍龍·張生 (2013) 「滬語文芸：消費海派？」『新民周刊』2013年26期
- 王平 (2010) 「上海地區方言電視節目的現狀及發展對策」『南方電視學刊』2010年2期
- 王悅陽 (2012) 「電視機里聽故事」『新民周刊』2012年44期
- 王悅陽 (2014) 「舒悅：阿姨媽媽們的貼心兒子」『新民周刊』2014年45期
- 薛才德 (2009) 「上海市民語言生活狀況調查」『語言文字應用』2009年2期
- 嚴紫九·鞏曉亮 (2005) 「從人力資源的角度看主持人管理的創新」『新聞大學』2005年3期

- 俞海宜（1995）「關於電視劇『孽債』的討論綜述」『社会科学』1995年4期
- 『語文建設』編集部（1987）「南方方言区推廣普通話工作經驗交流会在厦門市召開」
『語文建設』1987年6期
- 『語文建設』編集部（1993）「1993年南方方言区推廣普通話工作座談会紀要」『語文建設』1993年8期
- 趙建中（1996）「一部值得議論的電視劇—『走過冬天的女人』評析」『中国電視』1996年11期
- 中国廣播電視年鑑編輯委員會編（1987-2017）『中国廣播電視年鑑』1986～2016年版，北京廣播電視出版社
- 中国社会科学院新聞研究所編（1982）『中国新聞年鑑』（1982年版）中国社会科学出版社
- 周媛（2014）「淺議教育電視的媒介公共性—以上海教育電視台『家長』欄目（現改版為『幫女郎』欄目）為例」『新聞傳播』2014年11期
- 資中勇・肖堃（2011）「上海伝媒語言規範研究」『現代語文（語言研究版）』2011年4期
- [新聞]
- 『東方早報』2005年11月9日「出演電視版『長恨歌』黃奕：我比鄭秀文有優勢」
- 『東方早報』2012年1月5日「82位學者倡議科學保護上海話」
- 『東方早報』2012年1月6日「『新智力大衝浪』更名『樂來越開心』」
- 『解放日報』2004年4月5日「『緣來一家門』關注百姓 開播三月屢創收視佳績」
- 『解放日報』2013年6月14日「戲曲方言之美 化解溝通之障—訪滬劇院院長茅善玉」
- 『解放日報』2014年8月13日「海派情景喜劇時隔三年歸來『哈哈笑餐厅』9月登陸電視劇頻道」
- 『解放日報』2017年2月15日「次滬語賀歲劇“七十二家房客”熱播“天涯歌女”等經典有望推出」
- 『勞働報』2004年2月3日「情景喜劇『從頭開始』明晚開播」
- 『聯合時報』2012年1月13日「別压制滬語的『生存空間』」
- 『聯合時報』2012年6月12日「本市將籌建上海方言博物館」
- 『南方周末』2005年11月10日「[專題] 安峰：杭州人的“活宝”」
- 『上海青年報』2012年4月16日「舒悅脫口秀節目錄製：家常事舒心熱絡話悅耳」
- 『上海青年報』2014年8月12日「滬語情景新劇不走『老娘舅』老路」
- 『文匯報』2001年9月9日「『新上海屋檐下』：欲樹“海派情景喜劇”品牌」
- 『文匯報』2007年12月13日「“老娘舅”紛紛退出熒屏」
- 『新民晚報』2004年7月26日「“阿福”“阿狗”是一人 “兒子”“老子”難分清—從

熒屏情景喜劇“串角”現象看演員資源匱乏」

- 『新民晚報』2005年3月9日「情景喜劇『緣來一家門』：緣來天下是一家」
- 『新民晚報』2012年4月12日「“悅悅一口舒”新鮮出爐」
- 『新民晚報』2012年5月4日「舒悅 我不是“上海阿婆”我是地道的上海好男人」
- 『新民晚報』2013年7月30日「哈哈少兒頻道推出動畫版『滑稽王小毛』」
- 『新民晚報』2014年12月30日「跨年盛宴滿熒屏 新年晚會接踵來」
- 『新民晚報』2015年5月4日「『我們退休啦』今開播」
- 『新民晚報』2015年6月29日「沈寂多年的海派情景劇7月6日重現熒屏 “笑故事”能否一直笑下去」
- 『新民晚報』2017年3月9日「笑星雲集百集海派喜劇『笑哈哈餐廳2』今開播」
- 『新聞晨報』2005年6月25日「滬語版『孽債』重現熒屏“上海話”套牢“新上海人”」
- 『新聞晨報』2009年6月5日「上海戲劇曲芸頻率開始說滬語 純滬語節目占一半」
- 『新聞晨報』2011年1月15日「广电總局監管方言節目 純滬語節目退出熒屏」
- 『新聞晨報』2011年8月23日「上海話版『愛情公寓』因收視率不達標被停播」
- 『新聞晨報』2012年4月12日「『悅悅一口舒』計劃三大假期定期推出」
- 『新聞晨報』2012年6月20日「『新聞坊』周六改用滬語嘎三胡」
- 『新聞晨報』2013年9月2日「上海閑話電視劇首批『斷奶』打頭陣」
- 『新聞晨報』2013年9月27日「『大家幫儂忙』接棒『新聞坊』 王汝剛滬語講新聞」
- 『新聞晨報』2014年2月8日「官方調查：上海人普通話好於上海話」
- 『新聞晨報』2015年7月2日「王汝剛回滬滬語情景喜劇：交班時候還沒到」
- 『新聞晚報』2009年1月23日「毛猛達陳國慶姚祺兒邀你嘗“開心晚宴”」
- 『新聞晚報』2013年9月9日「滬語版電視劇試水熒屏網友追劇忙“挑刺”」